

コロナ対策 学校に過酷な負荷

藤井 剛（明治大学文学部）

先日、研究授業参観のため東京都内の中学校に行きましたが、現場は想像以上に深刻な状況です。先生の負担が増えています。分散登校で1クラスを前半後半の2グループに分けているので授業時数は2倍になり、本来50分間の授業時間を40分間で実施しています。そして午前の部の終了後、机や椅子、ドアノブを消毒してまわっています。

3カ月も授業がなかったため、生徒の間に理解の差が生まれていました。本来は個別指導をすべきですが、ソーシャルディスタンスだそうで、先生は生徒の近くで指導ができません。このままだと分からない生徒の「つまずき」は続くことになります。

政府はコロナ対策で公立小中学校の先生を3,100人増やすそうですが、全国で約3万校ありますので「焼け石に水」でしょう。学校規模にもよりますが、各校5～10人は増員されないと十分な指導はできません。ちなみに学習指導員なども含めた加配の予算はたった310億円だそうです。

学校はもっと「苦しい」「大変だ」と声をあげるべきです。日本の先生方は真面目すぎ、抱えこみすぎだと感じます。

「コロナ対策 学校に過酷な負荷」『朝日新聞』「声」2020年6月18日朝刊掲載

承諾番号 21-0334